

## 書評

### 上原作和著 『光源氏物語

### 學藝史—右書左琴の思想』

森野正弘

本書は上原作和氏の第二論文集である。前著『光源氏物語の思想史の変貌—〈琴〉のゆくへ』(有精堂、一九九四年)では、『うつほ物語』や『源氏物語』に通底する〈琴<sup>キ</sup>のこと〉の物語を「楽統継承譚」という観点から捉え、その「楽統継承譚」を貫く思想が物語史の流れの中でのいかなる変移の相を辿るかについて我々に縊いてみせた。以後、上原氏の位置付けは音楽研究のプロパーとしての側面が強調される傾向にあったと思いが、しかし、留意すべきは、上原氏の学会でのデビュー論文が『竹取物語』伝本の本文批判とその方法的課題(『中古文学』一九九〇年十一月)であり、またその五年後にも「青表紙本『源氏物語』伝本の本文批判とその方法的課題」(『中古文学』一九九五年五月、本書に統合されて所収)なる論文が発表されていた点である。そこには、紛れもなく本文研究のプロパーとしての相貌が窺えるのであり、今回上梓された本書では、漸くその本文と音楽の両面が相揃

い、ついに上原氏の研究の全貌が明らかにされたと言える。

全体の構成は、第一部「序論」、第二部『源氏の物語』原姿—〈本文史學〉構築のために」、第三部「記憶の中の光源氏」、第四部「物語作家誕生」の四部、全十六章から成る。そこに一貫して流れるのは文献実証主義の文学理念であり、「右書左琴」の思想さながら、本文批判と音楽研究を両機軸として、徹底した事実考証、出典考証が行なわれている。

音楽に関する諸論考の中でも第一部に配された「琴は胡笳の調べ」の章は、これまで上原氏が展開してきた琴曲「胡笳」に関する考察を更に補強、発展させたものであり、本書の総論としても位置づけられている。問題の所在とされているのは『源氏物語』「若菜下」巻に描かれてくる六条院の女樂の場面。女三の宮の弹琴に関して本文には「こかのしらへ」とあり、従来、「五箇の調べ」とするか「胡笳の調べ」とするかで説が分かれてきたところである。上原氏は前著でこれを

後者に解すべきことを『うつほ物語』の文脈を引き据えつつ論じたのであった。但しその際、演奏クライマックスの組曲として描かれた『うつほ物語』の「胡笳の声」と、琴キの独奏開始時の序曲として描かれた『源氏物語』の「胡笳の調べ」とが楽理的にどのような関係にあるかについては「胡笳」の用例調査から帰納された見解を示すに留めていたのだが、本著ではついにその点に対して文献による考証が施されることになったのである。参照されるのは、王昭君の悲劇をモチーフとする琴曲「胡笳」に関する漢籍の数々であり、それらの読み込みを通して次々に新たな事実が判明していくことになる。その結果、『うつほ物語』の「胡笳の声」は『樂府詩集』収載の琴楽関係文献の一つ『琴集』に見える楽曲「胡笳明君別」に比定されること、また、『源氏物語』の「胡笳の調べ」は六朝時代の琴譜『碣石調幽蘭』に見える「胡笳調」（黄鐘調）であり、それが楽曲「胡笳明君別」のオーバートюра（＝序曲）に他ならないことが明らかにされてゆく。この「胡笳明君別」とは、「辭漢。跨鞍。望郷。奔雲。入林」の五曲構成であり、それぞれは石崇『王明君詞』のプロットを翻案したものと目され、それゆえに『うつほ物語』の弹琴場面における本文叙述との照合が可能ともなっているのだが、瞠目すべきはその五種の曲名が『碣石調幽蘭』の「胡笳調」の項目に列挙されているという点である。その事実が明らかにされる条では、さすがに私も読みながら昂揚を禁じえなかった。

さて、こうして「胡笳の調べ」が認定されたことで、まるでミッシング・リンクが埋められたかのようにそれまで不明とされてきた琴キの演奏に関わる物語本文が氷解し始める。例えば第二部『源氏物語』の本文批判の章では、青表紙本に「五、六のはち（撥）」とある箇所について、琴の演奏法の実態に照らせば「五、六のはら（撥刺）」とある河内本に従うべきことが、現存する「龍翔操」の譜を用いて説かれるのであるが、実はこの「龍翔操」こそは旧名を「昭君怨」と言い、数百あったとされる「王昭君」の代表的琴曲なのであった。あるいはまた、第一部「身心の俱に静好なるを得むと欲せば」の章では、先の琴譜『碣石調幽蘭』と白楽天の詩「聴幽蘭」との連絡性に触れ、加えて「蘭」の和名が「藤袴」であることを踏まえ、琴曲「幽蘭」をめぐる逸話のモチーフが『源氏物語』「藤袴」巻における夕霧の造型を読み解く上での重要なコードとなることを指摘する。

本書のもう一方の柱である本文批判の諸論は、第二部に収められている。とりわけ、「尋木」巻のみ現存する伝阿仏尼等筆本の優位性を説く「青表紙本『源氏物語』原論」の章は圧巻である。通行の本文序列は、①定家本②伝明融等筆本③大島本となっているのだが、定家本は「尋木」巻を欠くため、伝明融等筆本以下が差し当たっての比較対象とされる。検討の委細をここに再現することは省くが、例えば《例D》とする箇所について、伝明融等筆本、大島本共に「いり給」

相互の目移りが認められるところであり、「定家の《青表紙本『源氏物語』》以前の本文の原態を保存するのが、この伝阿仏尼等筆本であると証明することができる」という。かな

り衝撃的な見解であるが、上原氏が見据えているのは単なる諸本文間の優劣ではない。念頭に置かれているのは、飛鳥井雅有の日記『嵯峨の通ひ路』に綴られた、藤原為家と阿仏尼による雅有への源氏学伝授の記事であり、「伝明融等筆本が冷泉家の定家臨模本に、飛鳥井雅康筆の大島本が飛鳥井家の証本に、そして、伝阿仏尼等筆本が、阿仏尼の手になったものとして」考えることで、伝阿仏尼等筆本こそが伝明融等筆本と大島本とをつなぐミッシング・リンクとなり得るのではないかという可能性である。

なお、本書に収められた音楽関係の論考の成果を踏まえ、更に「揺す」「按ず」といった琴の演奏法にまつわる用語を検証した上原氏の研究の一端が、「揺す按ずる暇も心あはたしければ」―『源氏物語』作家の琴楽環境―と題して平成十七年度中古文学会秋季大会（大阪府立大学）で口頭発表されたのであるが、それを論文化したものが、本年十月、栄誉ある「創設四十周年記念中古文学会賞」を受賞されることとなった。本賞は当学会の三十周年記念事業の一環として創設されたもので、十年に一度しか受賞の機会が与えられない、大変稀少なものである。上原氏の提唱する学説がいかに優れ、学術的に価値のあるものとして認められているかが、おわか

りいただけよう。同じ研究の道を歩む者としてまことに羨ましい限りであり、心から祝意を表したい。

（二〇〇六年五月 翰林書房刊 四二〇頁）